

国際おきなわ

KOKUSAI OKINAWA

No.62

CONTENTS

- 第35回 外国人による日本語弁論大会
- 災害危機管理シンポジウム
- グローバルリーダーシップセミナー
- 外国語絵本読み聞かせ教室
- ウチナンチュ子弟等留学生受入事業
- お知らせ 在住外国人のための生活相談
- 寄稿 大規模災害時における我々の役割とは
医療現場から ～沖縄県の多文化共生社会の実現に向けた浦添市医師会の活動～
災害時外国人支援サポーターとしてできること
医療通訳ボランティア活動の現場から
- イベント情報・賛助会員募集



国際協力・交流フェスティバル 2017 (主催：JICA 沖縄と共催)



公益財団法人
沖縄県国際交流・人材育成財団

OKINAWA INTERNATIONAL EXCHANGE & HUMAN
RESOURCES DEVELOPMENT FOUNDATION

第35回「外国人による日本語弁論大会」



県内在住外国人と県民が、異文化理解と共生の精神及び国際社会の在り方をともに考え、相互友好の一助とすることを目的に去る2月10日（土）に沖縄科学技術大学院大学（恩納村谷茶）に於いて「外国人による日本語弁論大会」を開催しました。昭和58年度から実施している本大会も35回目を迎え、17カ国32名の応募があり、本選には9カ国12名の弁士が出場しました。

最優秀賞にあたる「沖縄県知事賞」を受賞した、台湾出身の王俊人(オウ シュント)さんは電話対応の際に気付いたことを語りました。電話対応の中で「日本語の法則」を学び、失敗を重ねながらも「言葉で表す礼儀」について自分なりの想いを語り、聴衆を惹きつけました。

優秀賞にあたる「沖縄県国際交流・人材育成財団理事長賞」を受賞した、フランス出身のデュピュイ クレマンさんは「まだ、間に合います」という演題で、

身近な環境問題にスポットをあてて「エコロジカルな沖縄」を提言しました。

弁士の皆さん全員が堂々と壇上で発表し、来場者からは「何度もこの弁論大会を聞きに来ているが、心に響きとても有意義である。」「外国人の視点からの発表は目から鱗の内容であった。」等の感想が寄せられました。参加された弁士やご来場の皆様、また大会運営にご協力下さいました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



大会前のオリエンテーション



大会前 - 意気込む弁士たち



発表が終わってホッと一安心



応援してくれた皆さんと記念撮影

第35回大会入賞者

賞	氏名	演題	国	団体名
沖縄県知事賞	王俊人 王 俊人	日本の電話対応から学んだこと	台湾	国際言語文化センター 附属日本語学校
沖縄県国際交流・人材育成財団 理事長賞	デュピュイ クレマン	まだ、間に合います	フランス	琉球大学
沖縄テレビ賞	陳 澗 陳 澗	井上先生との出会いから	中国	琉球大学
審査員特別賞	タマン アルナ	日本に来る本当の理由	ネパール	サイ・テク・カレッジ 那覇校

演題

日本の電話対応から学んだこと

国際言語文化センター附属日本語学校 王 俊人 (オウ シュント：台湾)



日本という国は、礼儀をととても大切にします。それを一番わかりやすく表しているのが言葉です。日本語は時と場合によって使う言葉が違います。私は日本人ではないので、この日本語を上手に使いこなすのは、かなり難しいと思います。その中でも特に難しいと思う場面が電話対応です。電話というのは、相手に顔の表情やジェスチャーなどがまったく見えないので、言葉だけで礼儀を伝えなければなりません。

皆さんは、日本人と電話した経験がありますか。相手に何かを尋ねるときなど、教科書で勉強した言葉とまったく違うと感じたことはありませんか。私はそう感じています。

私は以前、日本でレストランのホールスタッフをやっていました。日本語をたくさん勉強したので、自信を持っていました。「いらっしゃいませ」「お下げしましょうね」「あっ、恐れ入ります」といった丁寧な言葉も自然に話せました。

ある日、いつも予約電話を受けている先輩が一週間の休みを取りました。店長が私に「せっかくのチャンスだから電話対応やってみないか。日本語の練習もできるよ。」と声をかけてくれました。店長の目が「頼むシュント。やってくれ」と訴えていたので、私は「はい。わかりました。」と答えました。私は自分に自信があったので、「電話対応も余裕だ」と思っていました。最初の電話が鳴りました。「お電話ありがとうございます」「\$*#&?」「えっ??」あまりにもびっくりして、思わず電話を切ってしまいました。電話の相手の言葉はととても速いし、言葉の使い方も全然違いました。その瞬間、私の自信はすっかりなくなりました。

でも、これはせっかくのチャンスです。その後もちぐはぐな敬語を使って、予約電話を受け続けました。

私が日本語で電話対応をする中で、一つ気づいたことがあります。それは「前置きと相槌」です。日本人は相手とコミュニケーションをとるときに、自分の言いたいことの前に「前置き」を使ったり、相手の話をよく聞いているサインとして「相槌」を打ちます。これは相手の気持ちを思いやる気持ちの表れではないでしょうか。

日本語は、できるだけ相手に迷惑をかけないよう

に、本当に言いたいことは、いつも文の中に潜んでいます。そこがわかると、その言い方が好きになってきて、私は日本流の言い方をこつこつと身につけていきました。

例えば、何かの誘いを断る場合は、「すみません」という挨拶から始まり、次に前置き「嬉しいお誘いですが」といい、次に理由「あいにく用事が入ってまして・・・」「・・・」本当に言いたいことは、この黙る空気感の中にあります。相手が話しているときは、「えー、えー」「そうですよね」と相槌を打って、「すみませんね。ありがとうございます。はいはい、お疲れ様です。」こんな会話になります。もしこれが中国語なら「その日は行けません」の一言で全部終わります。私は日本語は本当に丁寧な言葉だと思います。

この前、母国の友人と電話をしていて、日本で身につけた日本流の話し方が出てしまったことがあります。友人の誘いを私は断りたいと思い、いろいろな前置きや相槌ばかりをして、本当に言いたいことは言いませんでした。友人は私のはっきりしない言い方にイライラしていました。電話を切る時、私は最後まで「はい、はい、ごめんね、お疲れ様でした」という言い方をしていると、友人はとうとう怒って「お前、その言い方なんだよ。おかしいだろ。」と言って、私は「はっ」としました。私としては、日本で身につけた礼儀正しい言い方をしたつもりでしたが、台湾の友人にとっては、何が言いたいのか全然わからない変な言い方だったのです。

もちろん、相手の気持ちを考えて、言葉をやわらかく加減して言うことは悪いことではありません。しかし、それをやりすぎると本当に伝えたいことが伝わらず、本末転倒です。コミュニケーションがうまくいきません。ですから、一番大切なのは、そのバランスを取ることでないでしょうか。相手に礼儀を表しながら、でも本当に言いたいことははっきり伝える。このバランスがよくできれば、きっとお互いに気持ちの良い会話ができるはずです。私は「日本流」ではなく「自分流」の会話ができるように、これからも頑張ります。

演題

まだ、間に合います

琉球大学 デュピュイ クレマン (フランス)



フランス、と言えばパン、バゲットですね。私はフランス人らしく、パンなしでは生きられません。焼き立てのパンのなんとも言えない香りは、おそらく世界一心地いいものです。ある日私は大好きなパンを買うため、パン屋さんへ行きました。

レジにパンを持っていき財布をカバンから出していると、驚いたことに、店員さんがビニール袋にパンを包みはじめました。私はあわてて持ってきた風呂敷で包むようお願いすると店員さんは困った顔をして「つづれてしまいますよ」などと言って結局、ビニール袋に入れてしまいました。

パン屋での出来事は私にとって衝撃でした。なぜかというフランスだったらパンを包むなら、紙袋を使います。特に地方の場合はマイバッグなどに入れて持ち帰るのが普通です。

ビニール袋か紙袋か、大してちがわないように見えますが、実は大きな違いがあります。日本では、パンだけでなく、ほとんどの商品がプラスチックやビニールなどで包装されています。野菜や果物でさえ、ビニール袋で小分けされています。またコンビニでは、何も言わなければレジ袋に入れます。その状況に、私はとまどっているのです。

話はかわりますが去年の9月の末、沖縄に到着したばかりの私は、真っ先に海へ行きました。やはり、南国沖縄と言えば青い空、青い海の美しい景色ですね。フランスにいる時から、沖縄の海に憧れていたのです。実は沖縄の海は日本に詳しくない友達でも「沖縄に留学できるなんて、うらやましいな」と言うほど有名なのです。ですから、本当に楽しみにしていました。訪れたビーチは、浅いところからでもサンゴ礁が観賞できる素敵な海岸でした。水の中は気持ちいいなと感じながら泳いでいたところ、突然レジ袋がプカプカと近寄ってきたのです。こんなきれいな海に・・・とがっかりすると同時に、胸がキュンと痛みました。

日本には、「すべての物事には裏がある」という言葉がありますね。ビニールやプラスチックも例外ではありません。便利さの裏に危険性が潜んでいるのです。紙と違って一度リサイクルしたら、もうリサイクルできなくなり、「燃やすゴミ」になってしまいます。そして燃やしても、その灰が永遠に残って、土壌汚染な

どの深刻な問題を引き起こします。そこが紙袋とレジ袋の違いなのです。またビニール袋は軽いため風で海に飛ばされます。そのため、魚や亀、海鳥などがエサと間違えて食べ、死んでしまうケースが増えています。ある研究によると、私達がビニール袋を使い続けると、2050年には海鳥の9割以上がプラスチックを食べてしまうそうです。動物ばかりではありません。プラスチックが顕微鏡でしか見えないほど小さくなって、食べ物や水を通して人間の体に害を与える危険性も指摘されています。

環境問題は結果的に人間に帰ってくることは明らかです。日本語の表現を使うなら、「因果応報」。つまり私達の日常的な行動が重大な環境問題につながり悪影響があるということです。日本では確かにモノを包むという文化があり奥ゆかしいと思いますが、環境保護の立場から考えたほうがいいのではないのでしょうか。フランスでは、レジ袋はまだ禁止されてはいませんが、値段が高いため、マイ・バッグを自然と使うようになりました。

ビニールやプラスチックとは確かに便利で生活の隅々まで浸透していますが少しずつ消費習慣を変えるだけで、地球にやさしくすることができます。まず買物ではマイ・バッグを徹底することです。白っぽくて不恰好な袋のかわりに、おしゃれなマイバッグの方が素敵だと思いませんか。

また、フランスで最近、急速に普及している量り売りをお勧めします。量り売りでは、店頭で自分の容器を持って行って必要な分を買うので、無駄なパッケージが不要になります。

私は琉球大学で「エコロジカルキャンパス」という学生委員会に入り、ごみを拾ったりゴミの種類を調査する活動に参加しています。「塵も積もれば山となる」ということわざがあります。世界中の人、一人ひとりが自覚すれば、大きな効果が出ると思います。意識を高め、小さなことでも、まずできることから始めることがとても大切だと思うのです。

世界的に知られている沖縄のエメラルドブルーの海。「エコロジカル沖縄」をめざし、海だけでなく自然という財産を守りましょう。今からなら、まだ間に合います。

災害危機管理シンポジウム

大規模な災害が起きた際に、増え続ける在住外国人や外国人観光客等の対応を含めて避難所をどう運営すればよいのか等、課題について考える「災害危機管理シンポジウム」を平成30年1月11日（木）に沖縄産業支援センターで開催しました。（共催：一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー/那覇市消防局）シンポジウムには沖縄の地域防災計画に定められている関係機関や、当財団で養成している災害時外国人支援サポーターなど70名程が参加しました。

シンポジウムでは基調講演として、岩手県陸前高田市で実際に東日本大震災時に避難所運営に携わり、現在避難所運営アドバイザーとして活躍されている佐藤一男氏をお招きし、「東日本大震災、体育館避難所で起きたこと」をテーマにお話いただきました。

基調講演での学びを基に、午後には那覇市消防局の

ファシリテートによる「避難所運営訓練（HUG）」を行いました。5人前後のグループに分かれ、避難者に見立てた避難者カードを体育館に見立てた模造紙に配置（避難）していった他、「全員に行き渡る量の食料が準備できない」など80にも渡るイベントにも並行して対応し、その対応策をグループで検討しました。またその結果を佐藤氏の実体験に基づき、講評していただきました。

参加者からは、「「避難所」運営や行政がどう対応すべきかはまだまだ勉強不足と痛感した」や「実際に体験した方のノウハウを伺うことができ、貴重な経験になった」などの感想が寄せられました。

当財団では、このようなシンポジウムを定期的に行うことで、平時から関係機関との協働体制の構築を図る他、ソフト防災の環境整備に力を入れていきたいと考えております。



「災害時における外国人支援」に関する講演



佐藤一男氏による基調講演



HUG 訓練に取り組む参加者



200名の避難者と80ほどのシナリオに対応

グローバルリーダーシップセミナー

去る2月17日(土)に、恩納村の沖縄科学技術大学院大学(OIST)にて第5回グローバルリーダーシップセミナーを実施し、中学生から大学生まで15名が参加しました。午前中は、「自発的な英語コミュニケーション力」を高める為のガイダンスの後に、OISTの外国人研究者や職員をインストラクターとして迎え、英語のみで交流研修会を行いました。1名のインストラクターに2~3人の参加者が割り振られるため、否が応でも英語でコミュニケーションを図らなければならない環境の中で、自分で表現しきれないことは、シンプルな言い方に置き換えたりジェスチャーを交えながら伝えたりと、緊張してしまったという参加者もいましたが、参加者1人1人が一生懸命伝えたいことを伝えました。

後半に行われた英語によるディスカッションでは「アメリカの訴訟問題」を扱った読み物を用いて、多国籍なインストラクターと母国での訴訟事情に触れたり、また参加者同士で意見交換したりと、多様な文化圏の考え方を学びました。

イングリッシュランチョンを行った後、午後の批判的思考力スキルを高めるセミナーでは「格差」をテーマにグループディスカッションと発表を行いました。

「どのような格差があるのか？」という問いからスタートし、その現状や解決策を議論しました。参加者からは『大きなテーマだったが、問題を一方からではなく切り口を変えて見ていくという考え方を学んだ』、『前回参加したときよりもディスカッションのテーマを更に身近な問題として捉えることができた』という感想が挙がりました。お互いに共通のテーマをもって議論することで十分に刺激を受け、今回も1日を通して確かな学びがありました。

今年度は沖縄科学技術大学院大学を会場に年5回実施し、述べ124名が参加しました。新年度は本研修を“English & Cross-culture Seminar”に名称を変更し、さらに内容を充実させて実施して参りたいと思います。



英語でコミュニケーションする参加者と講師



与えられたテーマを英語でディスカッション

外国語絵本読み聞かせ教室

多文化共生社会を推進するため、県内に住む外国人・県民の親子を対象に外国語による絵本読み聞かせ教室を開催いたしました。

本年度は5回開催し、シンハラ語(スリランカ)、ベトナム語、タガログ語(タイ)、英語、中国語、ドイツ語、フランス語の7か国語での読み聞かせを行いました。

外国語の絵本はもちろん、外国で親しまれている日本の絵本を読み聞かせしたり、講師の方々から母国



外国のものの展示



読み聞かせの様子



読み聞かせの様子

の文化や簡単な外国語を教えていただき、ゲームを交えて外国語に触れることができました。

参加した親子の皆様からは、「普段知ることの出来ない言語に触れあえてよかった。」「いろいろな国のことを知ることができた。」など、大好評をいただきました。

次年度も県内各地の図書館や公民館などで開催する予定です。皆様お誘いあわせのうえ、ぜひご参加ください。

今年読んだ絵本		
国・地域	言語	邦題
スリランカ	シンハラ語	ねこの国のおきやくさま
アメリカ	英語	できるかな? - あたまからつまさきまで
ベトナム	ベトナム語	すいかのおはなし
フィリピン	タガログ語	いちばにおでかけ
中国	中国語	子馬の川渡り
イギリス	英語	まじよとねこどん ほうきでゆくよ
ドイツ	ドイツ語	ちびでぶかバくん
フランス	フランス語	ほしの王子さま
日本	中国語	であえてほんとうによかった

ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業

当財団では、沖縄県から委託を受けて、海外移住者の子弟やアジア諸国の優秀な人材を県内大学や企業などで修学・研修させ、将来のウチナーネットワークの架け橋となる人材を育成する「ウチナーンチュ子弟等留学生受入事業」を実施しております。

本年度は、アルゼンチン、アメリカ、カナダ、ブラジル、ペルー、ボリビア、中国、台湾の8つの国と地域から14名の留学生・研修生が沖縄で留学・研修を行いました。

名桜大学、琉球大学、沖縄国際大学、沖縄県立芸術大学では日本語や日本・沖縄の文化、歴史について学び、他にも出版・印刷や農業工学などの企業研修生、三線製作や太鼓製作を学ぶ伝統芸能研修生が沖縄の文化や技術を学びました。

大学や研修機関での修学・研修以外にも、10回の研修を通して、帰国後の活動のヒントや、沖縄についてより深く知り、県民の皆様へその経験と学びを報告しました。

研修を通して、留学生に求められていること、沖縄の歴史と文化・自然について、県民の皆様の協力を得ながら学ぶことができました。それぞれの研修で新たな発見や考え方を知り、人とのふれあいや出会いがありました。研修にご協力いただいた関係者の皆様へ心より感謝申し上げます。

その他にも、パンアメリカン連合会が主催する移民の日交流会や各国の独立記念日祝賀会への参加、テレビ・ラジオ・新聞など様々なメディアで留学生の活動が取り上げられ、多くの方々とふれあい、出身国・地域のことを発信する機会を得ることができました。

留学生は、3月に帰国いたします。帰国後出身国で活動する者、また沖縄に戻ってきて県内企業へ就職や大学院へ進学する者と様々ですが、どの国にいても、何をしていても、この1年の経験を大いに活かしてくれることでしょう。今後の彼らの活躍が楽しみです。

【本年度通年研修】

研修① 県の施策説明	～ウチナーンチュ子弟等留学生に期待されていること～
研修② 目標設定	～1年間の目標を立てる～
研修③ 平和学習	～平和祈念資料館の視察と平和に関するワークショップ～
研修④ 歴史学習	～県立博物館の視察と沖縄近代史についての講義～
研修⑤ 伊江島民泊研修	～沖縄の自然と県民との交流～
研修⑥ 文化体験研修	～那覇まちま～いでの地域住民のくらしと伝統工芸体験～
研修⑦ 京都事前研修	～京都の歴史と日本の伝統文化～
研修⑧ 京都研修	～京都と沖縄の文化の違いを知り、両文化を深く理解する～
研修⑨ 留学の振り返り	～1年間を振り返り、帰国後の活動を具体的に～
研修⑩ 留学・研修報告会	～1年間の経験を報告・発表する～



お知らせ

在住外国人のための生活相談

県内在住外国人を対象とした法律相談を平成31年4月から導入いたします。法律相談を実施することにより、生活する上で法的な問題に直面している在住外国人を支援して参ります。実施に向けて、関係機関との協働体制の構築を図る他、今後在住外国人や関係者への聞き取り調査等も検討しております。本県の多文化共生社会のまちづくりに向けて、皆様のご協力をお願い致します。

大規模災害時における我々の役割とは



「災害時の外国人支援」と聞いて、まず思い浮かべるのは、被災状況の翻訳や避難所での通訳といった言語関連のことではないでしょうか。昨今の日本全国及び沖縄での、外国からの観光客や留学あるいは就業を目的とした在住外国人の増加傾向を見れば、そう考えるのは当然だと思います。平成27年に「災害時外国人支援サポーター養成事業」の企画をはじめたときに、いっぺんに考えたのは、やはり複数言語での情報発信でした。また、我々が参加する一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）の地区ブロックの災害時訓練においても、かつては「〇〇地区、震度5強、鉄道及び公共交通機関は全面ストップ。国道△号線は通行止め」といった情報を、いかに早く多言語で発信できるか？ということしかやっていませんでした。

しかし、地域の国際交流団体が担うべき災害時の役割として、なにか物足りない、もっと大事なことがあるのではないかと考えるようになりました。

財団では、大規模な災害が起こったときに、主に避難所において日本語での意思疎通が難しい人の手助けをしてもらう「災害時外国人支援サポーター」の養成を行っています。この養成講座を企画するにあたり、過去の地震や津波での事例を集めました。そして経験者や過去に被災した地域の国際交流団体の話を聞き、サポーターとして協力してくれる方々にどのような活動が求められるのか、知識として何を提供すべきなのかということを考え、講座の内容を詰めていきました。すると、ますます翻訳、通訳の優先順位が下がっていきました。

大きな災害が発生した直後においては、どこもかしこも大混乱です。交通機関は麻痺し、場合によっては消防や警察の通信さえ途絶しているかもしれません。ましてや、人が押し寄せる避難所では、整然と行動することが相当難しくなると予想されます。もちろん、そういう状況にあって、外国語で情報を伝えることや、その人の母国語で話すことで安心させてあげるといった行動は有益ではあります。しかし、それだけを我々やサポーターの役割だと考えるのは早計です。

例えば、各地の震度や津波情報、交通情報などを伝える手段は、平常時から多言語テンプレートで準備できます。文章は予めできていて、数字を記入するだけでいいのです。災害時のピクトグラム（絵単語）も多数、開発されています。「やさしい日本語」を使うという手段もあります。これらは、役に立つと同時に現実的でもあります。なぜなら、沖縄に住む外国人の国

籍は118カ国にもわたるので、すべての言語に対応するなどどう考えても無理です。

また、「余震が怖い」「断水でトイレが使えない」「電気はいつ復旧するのか」「備蓄が乏しい。水や食料などの支援物資は来るのだろうか」こういう問題は、国籍、年齢、性別、宗教、避難先を問わず、誰しものが抱える問題です。であれば、言葉が通じなくても、ジェスチャーで通じることもあるでしょう。電波が通じれば翻訳アプリが使えます。不安を抱えている人がいれば、言葉より手を握ってあげるほうが、有効かもしれません。

ただし、これらはあくまで初動期の話です。時間が経過するほど、状況は複雑化し、訳する内容も対応も難しくなっていきます。

以前、「同じ外国人でも、在住者と観光客は違う。財団は防災訓練などで、観光客の対応はしないということをもっと外部にPRすべきだ」と言われたことがあります。災害現場において、相手が在住者か観光客かで対応を変えるなどは、言ったことも考えたこともなかったもので、啞然としましたが、こういう考えを持つ人がいるということは、災害時の国際交流団体としての役割が確立されていないことの証左かもしれません。

さて、もしそのときになったら、実際には我々に何ができるでしょうか。その答えは、養成講座や災害危機管理シンポジウムをとおして出していきたいと考えています。



災害時外国人支援要請講座 -DPAT と心のケアについて



避難所運営訓練の様子

山本クリニック院長/EAP産業ストレス研究所所長 山本和儀

医療現場から ～沖縄県の多文化共生社会の実現に向けた浦添市医師会の活動～



沖縄県は2009年3月に「おきなわ多文化共生推進指針」を出し、“イチャリバチョーデーの心で世界に開かれた地域の創造”の基本理念の下、在住外国人が安心して生活を送れるように努めています。また財団では多言語対応可能な医療機関の情報や多言語医療問診票の提供、医療ボランティアの養成等を行っていますが、十分周知されているとは言えませんでした。

ところが、2015年の厚生労働省・沖縄労働局の調査によれば、急増する外国人観光客への対応や海外展開を見据えて沖縄県内では外国人の労働者を採用する事業場が増え、外国人労働者数が過去5年間で1.65倍に達し、全国2位の増加率でした。このような外国人の増加に伴う社会問題等の報道に触れる機会が増え、クリニックでの診療だけでなく外国人の診療を浦添市医師会でも推進していく必要を強く認識するようになりました。「外国人の診療に関するセミナー～それぞれの医療機関での工夫と苦労、課題～」を企画し、浦添市医師会会員の中で外国人の診療経験が豊富な関係者を中心にした勉強会を2015年10月14日に開催しました。牧港中央病院洲鎌盛一院長、名嘉村クリニック名嘉村博院長、島尻キンザー前クリニック島尻佳典院長、浦添総合病院城田真一副院長、および筆者が登壇し、それぞれの医療機関での取り組みの現状や課題が報告されました。外国人の診療は英語である程度は対応できているものの、英語以外の言語への多言語的対応も求められていて、ITを活用した多言語への取り組みの実例が紹介されました。また文化を理解する能力の重要性、外国人患者受け入れ医療機関認証制度（JMIP）による品質保証や無保険患者への対応等の課題が明らかになり、定期的な医師会会員の勉強会の開催が提案され、年に2回程度の外国人診療に関するセミナーを続けていくことが決まりました。そのセ

ミナーの模様を、12月に開催された第120回沖縄県医師会医学会総会で報告し、沖縄県医師会医学雑誌へも掲載。2017年6月に那覇市医師会から招聘されて浦添市医師会の取組みを紹介し、逆に2018年2月には那覇市医師会員の形成外科KC新城憲院長を招聘。自院での取り組みやアラブ首長国ドバイでの定期的な訪問診療活動の報告、外国人診療を巡る課題への提案など、豊富な外国人診療の経験から具体的に学ぶことができました。この間、日本大学医学部等で医学英語教育や医療通訳養成、多文化医療ネットワーク形成の領域で活躍中の押味貴之医師を招いて、『医療職の英語教育と地域での多文化医療ネットワークの形成』のテーマで、新しい医学英語教育の実際を、ライブ感あふれる講演の中で体験させてもらいました。また本財団の葛孝行主任を講師として招聘し、『本県の在住外国人の医療機関受診の現状と課題』と題して、医療通訳ボランティア養成事業など、財団の取組みを紹介していただき、浦添市医師会とのネットワークを築きました。

南西地域産業活性化センターの将来人口推計によれば、沖縄県の人口は2025年にはピークを迎えて減少に転じ、外国人が増加して2065年には人口の4%に達する見通しです。在住外国人の診療のみならず、外国人観光客の救急受診や診療費の未払い問題等、課題は山積しています。これからも、コメディカスタッフや事務職員を交えた研修会や情報交換会の開催と医療機関・担当者のネットワーク形成、薬局との連携、国際交流・人材育成財団等の外部団体との連携等、浦添市医師会だけでの問題解決に止まらない沖縄県の医療界全体への展開による問題解決を図り、浦添市や沖縄県がますます世界に開かれた地域として発展することに寄与して参りたいと考えています。



浦添市医師会外国人 2015



浦添市医師会外国人 2018-4

災害時外国人支援サポーター2期生 大澤樹子

災害時外国人支援サポーターとしてできること



まず、大人数の前で話す事が大変不得意な私に、活字でお話をさせて頂く機会を与えて下さいました事に深く感謝致します。

私は「物事はタイミング」だと思っています。良い事も悪い事も、そして出会いも別れも。そして、そのタイミングはどこかで繋がっていくのだと思います。今迄の人生での人々との出会い、そして災害というもののへの関わりが今、この沖縄で沖縄県国際交流・人材育成財団を通して繋がっていきこうとしています。

子どもの頃から親に聞かされてきた災害の話、危機管理
阪神淡路大震災でのボランティア
海外生活で学んだ文化や習慣の違い、助け合う精神
東日本大震災時の東京での状況、外国人を含む人々の反応
震災後の東北の状況、人々との繋がり
沖縄での様々な経験
熊本大地震後のボランティアとの再会、
そして人々との出会い
メキシコ地震での旧友とのコンタクト

「大丈夫だよ」「大丈夫？」

言語は関係なく、この言葉の意味の大切さを何度も何度も感じてきました。

沖縄に住むきっかけになった4年前の3月初め。訪沖初日の夜中から胃腸炎になり、ひどい腹痛と吐き気で救急車を呼ぶかも考えていた明け方に起きた沖縄本島震度4の地震。即座に窓を明け、正面の海に目を凝らし、津波警報に耳を済ませました。

辛い警報は鳴りませんでした。もし鳴ったとしても土地勘が全くなく、立ち上がる事も辛いあの状況で逃げる事が果たして出来ただろうかと、今も思います。

朝を待ち、胃腸科で点滴を受けている間に2回目の地震。航空機の震動と思っていた為、後から聞くまで気付きませんでした。忙しい仕事の合間を縫って訪沖したにも関わらず、訪問予定がキャンセルに、そして帰京後の仕事への影響を思うと涙がでました。

そんな時に先生から、

「大丈夫だよ。きっと面接合格するからね～」と優しく声を掛けて頂きました。親類も友人知人もいないこの島でこの言葉は私には救いでした。

(実際には面接を受けに来た訳ではなかったのですが…)

結局、不思議な縁で本当に沖縄に引っ越し事となりましたが、この経験は正に「災害時外国人支援サポーター」として私に何が出来るかを示唆しています。何故なら自分が経験したことを基に、逆の立場を想像で

きるからです。

あれから4年、知れば知るほど沖縄という県はダイバーシティであると実感します。

在沖の知人外国人の国籍の数を考えてもすぐに10は越えます。出会った訪沖外国の方の国籍は更にバラエティに富んでいます。

在沖居住者の国籍の数118カ国…。その数を聞いた時、驚くと同時に深く納得しました。そこに、内地からの移住者の出身地も加えると沖縄の多様性は他の大都市と変わらないのではないかと思います。

そして驚くほどの早さで変わっていくこの沖縄だからこそ、やらなければならないことは本当に多くあると思います。その中の大きな一つが「災害に対する備え」だと思っています。

災害はいつ何時、どこで起こるか分かりません。

沖縄県も全く他人事ではありません。

どんな災害の経験も、失ったものの悲しみも、何年経っても完全に忘れることはできません。そして人はずっとその心の痛みを持ちながら生きていきます。沖縄の方達はそれをよくご存知だと思います。

「命どう宝」

その言葉の意味を知っている沖縄の方達だからこそ、防災への意識を高め、「いちやりばちよーでー」の心で、どんな肌の色の人も、どんな出身地の人も、どんな言語の人もとも助け合えるはずだと思っています。

防災・減災に関しては、どんなに一人で頑張っても、限界があります。普段からどれだけ縦横隔てなく繋がっているかが、非常時には大きな力となることを様々な方々から聞いてきました。被災地の方々の「忘れないでほしい」という言葉、そして大切な人や物を失くされた方々が、「少しでも多くの人にいざという時には助かって欲しいから」と、その辛いご経験を私たちに語って下さる、その想いを次に繋げることが私たちにできることだと思い、これからも学びと備えと繋がりを深め、前向きに、「笑顔」で広めていきたいと思っています。



第7期医療通訳ボランティア7期生 田中祐子

医療通訳ボランティア活動の現場から



昨年6月～7月にかけて、沖縄県国際交流・人材育成財団の医療通訳ボランティア養成講座をスペイン語にて受講し、2017年8月よりスペイン語と英語での医療通訳ボランティアとして登録して頂きました。これまでスペイン語での派遣はまだ経験がないのですが、英語では県内のクリニックや県立病院、市町村の乳幼児健診、産婦人科の母親学級などで5回ほど医療通訳の活動をさせて頂きました。今回はその中で一番直近に関わらせて頂いた母親学級での活動について、少しご紹介出来ればと思います。

事前に依頼元の担当者（日本人）の方とメールでやりとりをさせて頂き、母親学級で話される内容やクリニック側で母親学級向けに使用する教材が日本語であるかどうかを確認して頂きました。クリニック側からは事前に提供出来る資料はないというご案内だったため、インターネットを通じて陣痛やお産が近いサイン、呼吸法などについていくつか参考になりそうなものを調べ、当日使われそうな専門用語をメモして英単語リストを作り準備しました。また、同じような情報に関して、英語で書かれた文献にもいくつか目を通し、陣痛やお産が近づいたサイン等についての英語での言い回しや体の部位等の呼称を確認しました。

当日クリニック前でお会いしたのは、出産予定日を1ヶ月後に控えるご夫妻でした。英語が第一言語の方ではないですが、英語でのコミュニケーションは問題なく、使われる専門用語も普通に理解されていました。母親学級には、他に日本人の参加者のご夫妻やお一人で参加されており、全員で11～12名程度のグループでした。外部講師として助産師の方が来られ、参加者とのやりとりも交えながらのグループセッションを通訳対象者の耳元でウィスパリングする形で通訳しました。これまで関わった医療通訳は、医師や看護師の方と通訳対象者の方（患者さん）との間に入っての、一対一の会話を逐次通訳するものが多かったのですが、今回のグループセッションは助産師さんの説明を日本人参加者の方とのやりとりも含めてほぼ同時通訳の速さで訳す必要があり、陣痛や出産のプロセスに関する専門用語が多く使われたセッションでしたので、ついていくのがやっとのスピードでした。同時に、安全な出産に関する大切な情報も多く話されたので、通訳対象者の方にきちんと正確に伝わっているか、伝える情報に漏れがないかにも慎重に気を配りながら進めました。

通訳対象者の方も含め、参加していたほとんどの方が初めての出産ということで、助産師さんの説明を通訳していると、通訳対象者の方からは何度か質問が出ることもありました。グループセッションだったので、講師の方の全体への説明中にタイミングを見ながら声かけし、対象者からの質問を訳しました。その後保育園の見学や院長先生のご挨拶などがあり全部で3時間程度の長丁場でしたが、とても頭を使い緊張した3時間でした。

“The more you learn the more you realize how little you know.”（学べば学ぶほど自分がいかに少ししか知らないかに気づかされる）

これは、すでに医療通訳として病院内で仕事をしている友人が言っていた言葉です。その友人は英語が第一言語で、医療の専門用語もスラスラ英語で出て来る程の方なのですが、常日頃から医療通訳に関わられている方ならではの、重みのある言葉だと思いました。

医療通訳で対象となる医療の知識は専門的でとても幅広く、その前提として身体の部位や器官の名称・機能など解剖学的な知識や理解がある程度は求められます。医療通訳の勉強を通じて医師の方から直接お話を聞かせて頂く機会もあり、いろいろと勉強になります。今後も医療通訳としての勉強や経験を積み重ね、県内で医療機関を受診する外国人の方が少しでもスムーズに安心して医療サービスを受けることが出来るよう、医療通訳の立場からも最大限努力していきたいと思っています。



イベント情報

詳しくは HP (<http://kokusai.oihf.or.jp/>) で!

日本語読み書き教室

参加者募集

受講無料

対象 日本語の読み・書きを勉強したい在在外国人

学習内容 小学1年生～6年生程度の日本語

実施期間 2018年4月20日(金)～

開催日時 毎週金曜日(祝日を除く) 19:00～21:00

実施場所 沖縄県国際交流・人材育成財団 (宜野湾市伊佐4-2-16)

サポートボランティア(英・中・西)も募集!
詳しくは、国際交流課まで!

お問い合わせ: (公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課
TEL: 098-942-9215 FAX: 098-942-9220 Email: kokusai@oihf.or.jp
HP: <http://kokusai.oihf.or.jp> Facebook: www.facebook.com/oihf60

平成30年度 災害時外国人支援 サポーター養成講座

受講者募集

受講無料

目的 災害時に要支援者となりがちな外国人を支援するため、大規模災害時に当財団が立ち上げる「多言語支援センター」と協力し、避難所巡回や情報収集等を担えるサポーターを育成します。

募集定員 60名程度

募集締切 平成30年3月12日(月)～

4月25日(水) 15時必着

その他

- 講座の内容や応募方法等は、当財団ホームページ <http://kokusai.oihf.or.jp> でご確認ください。
- 講座参加に語学力は不要です!

サポーターの認定
全講座(6回)全て受講した方を「災害時外国人支援サポーター」として認定します。

お問い合わせ: (公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団
TEL: 098-942-9215 FAX: 098-942-9220 HP: <http://kokusai.oihf.or.jp>

★Participants Wanted★ English and Cross-Culture Seminar

目的 2018年 実施日・場所

自分の考えを英語や日本語で論理的に発信できる人材の育成を目的としたインプット型研修を沖縄科学技術大学院大学(OIST)で実施します。

研修の前半は、OIST研究者やスタッフと英語のみでコミュニケーションを図る他、与えられたテーマについてグループで英語によるディスカッションを行います。また、参加者の将来へのキャリアゴールを考える機会として、英語によるOISTキャンパスツアーに参加し、施設や研究室を見学することで学びへのモチベーションに繋がります。

後半は、21世紀型スキルとされている「批判的思考力」を高めるためのグループワークを行い、物事を相手に論理的に伝えるための基礎を学びます。

参加方法

- ・2018年4月22日(日)までに当財団ホームページ (<http://kokusai.oihf.or.jp>) にあるオンラインフォームからお申し込みください。
- ・参加に際し、書類選考を行います。
- ・定員40名以上の応募がある場合、募集を早めに締め切ることがあります。

参加対象者

★終日セミナーに参加できる中学生から大学生

お問い合わせ: (公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課 葛・久田
TEL: 098-942-9215 FAX: 098-942-9220 Email: kokusai@oihf.or.jp
<http://kokusai.oihf.or.jp> Facebook: www.facebook.com/oihf60

医療通訳ボランティア 養成講座

受講者募集

受講無料

目的 県内の在在外国人が安心して地元の医療機関を受診できるよう、医療通訳ボランティアとして活動できる人材を育成します。

定員 40名(応募者多数の場合、受講できないことがあります)

募集対象 次の2つの要件を満たす方

1. 医療通訳ボランティア事業に強い関心を持ち、対象言語のいずれかでビジネスレベルのコミュニケーション力がある方
2. 全講座(7回)を受講*できる方

*全講座の受講修了登録者として認定します。

養成対象言語 英語・中国語・韓国語・スペイン語 (研修の一部は、それぞれの言語で実施します)

募集期間等 平成30年4月1日(日)～5月20日(日) 必着
具体的な日程等は、HP(<http://kokusai.oihf.or.jp>)に掲載されている募集要項をご確認ください。

お問い合わせ: (公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課
TEL: 098-942-9215 FAX: 098-942-9220 Email: kokusai@oihf.or.jp
HP: <http://kokusai.oihf.or.jp> Facebook: www.facebook.com/oihf60

▲11月には石垣市でも開催いたします。

賛助会員募集

公益財団法人沖縄県国際交流・人材育成財団(OIHF)は、本県の多文化共生社会の推進に寄与し、振興発展を担う人材育成事業や、国際性豊かな活力ある沖縄づくりを目指し、国際交流・協力事業を推進しております。当財団の趣旨や活動に賛同し、活動を支援して下さる、賛助会員を募集しています。

沖縄県国際交流・人材育成財団の事業は、会員の皆様の支援によって支えられています。皆様のご協力をお願いいたします。

【年会費】個人: 3,000円 団体: 10,000円

国際おきなわ (No.62) 2018年3月発行 編集・発行/公益財団法人 沖縄県国際交流・人材育成財団
ホームページ <http://kokusai.oihf.or.jp/> フェイスブック www.facebook.com/oihf60
〒901-2221 沖縄県宜野湾市伊佐4丁目2番16号